

平成 30 年度日本海ソデイカ(あかいか)長期漁況予報

但馬地域の沿岸漁業にとって重要な対象種となっている「ソデイカ(あかいか)」について、今漁期の長期漁況予報を発表します。今後の漁業操業の参考になれば幸いです。

見通し(予報対象期間:平成 30 年 9 月~11 月)

【来遊資源量】

- ・過去 5 年平均(2013~2017 年)と比べると「**平年並み~やや多め**」、過去 10 年平均(2008~2017 年)と比べると「**平年並み~やや多め**」で推移。
- ・前年度漁期に比べて漁模様は「**同等~やや多め**」となる見込み。
- ・1 日 1 隻あたりの漁獲量(9~11 月平均)は、150~160kg の見込み(前年度漁期実績は 145.6kg)。

【漁場】

- ・山陰・若狭沖冷水域の張り出しは、規模、接岸状況とも「**平年並み**」、対馬暖流域の 50m 深水温は日本海西部で「**平年並み**」で推移し、漁場はやや沿岸に形成される見込み。

【その他】

- ・今年 6 月末以降、但馬沿岸各地で概ね胴長 20cm 台の小型のソデイカの目撃情報、混獲情報が複数寄せられています。例年よりも早いですが稚イカは順調に日本海に來遊している模様です。

* 予測に使用した海洋観測資料は、「佐賀県玄海水産振興センター」、「第七管区海上保安本部海洋情報部」、「国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所」からご提供いただきました。また、海況予測には、「国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所」の拡張版日本海海況予測システム(JADE2)を利用しました。記してお礼申し上げます。

1. 資源状態

兵庫県におけるソデイカの漁獲量は、2000 年前後には年間 1,000 トンを上回ることもありましたが、直近 5 カ年(2012~2017 年)の年間漁獲量をみても 2.3 トン~350 トンと近年変動が大きくなっています。来遊資源量のひとつの目安となる漁獲量の変動は日本海の各府県間で非常に似通っており、本県の漁獲量が多いときは他府県の漁獲量も多く、本県が少ないときは他府県でも少なくなる傾向があります。日本海のソデイカ資源は大きくひとつとして捉えることができるようです。

2. 日本海区水産研究所発表の海況(水温や冷水域の配置)予報(2018 年 7~9 月)

- ①山陰・若狭沖の冷水域の張り出しは、規模、接岸状況とも「**平年並み**」で経過する。
- ②対馬暖流域の表面水温は「**やや高め**」、50m 深の水温は日本海西部では「**平年並み**」、北部では「**やや高め**」で経過する。

3. 漁況予報(見通し)の説明

日本海で漁獲されるソデイカは、2~3 月を盛期とする 1~9 月頃に発生し、対馬暖流の上流部から来遊してくる資源と考えられています。例年、6 月末頃には胴の長さが 15cm 以下の「稚イカ」が但馬地域の定置網等で混獲されることから、日本海への来遊はこの時期に始まっていると思われます。

これまでの調査結果により、来遊時期と考えられる「6 月」の対馬暖流の環境条件(水温、塩分、潮位等)と、その年の 9~11 月の資源水準(1 日 1 隻あたり漁獲量)との間には関係がある

ことがわかっています。図1は、その一例を表したものです。横軸が対馬海峡部の6月初旬の水温（水深10～20m層の平均水温度）、縦軸がその年の兵庫県沖の9～11月の資源水準（1日1隻あたり漁獲量）を示しています。この図から6月の水温度が高い年は資源水準も高く、逆に水温度が低い年は資源水準も低い傾向がみられます。

また、同じ時期の対馬海峡部の底層塩分や、対馬（厳原）の潮位（6月の平均潮位）などが関係していることもわかっています。そこで、これらの環境条件をもとに、複数の予測モデルから来遊資源水準を推定したところ、図2のような結果となりました。

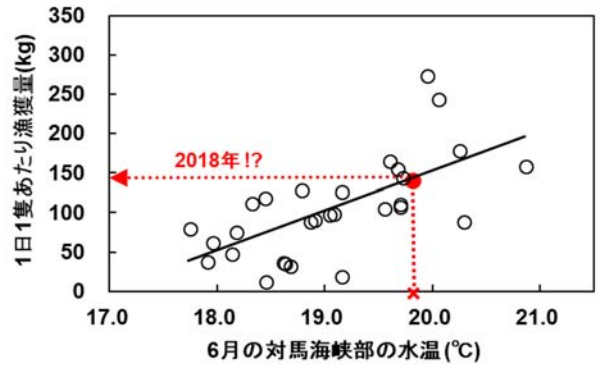


図1：6月の水温度と漁期中の来遊資源水準との関係

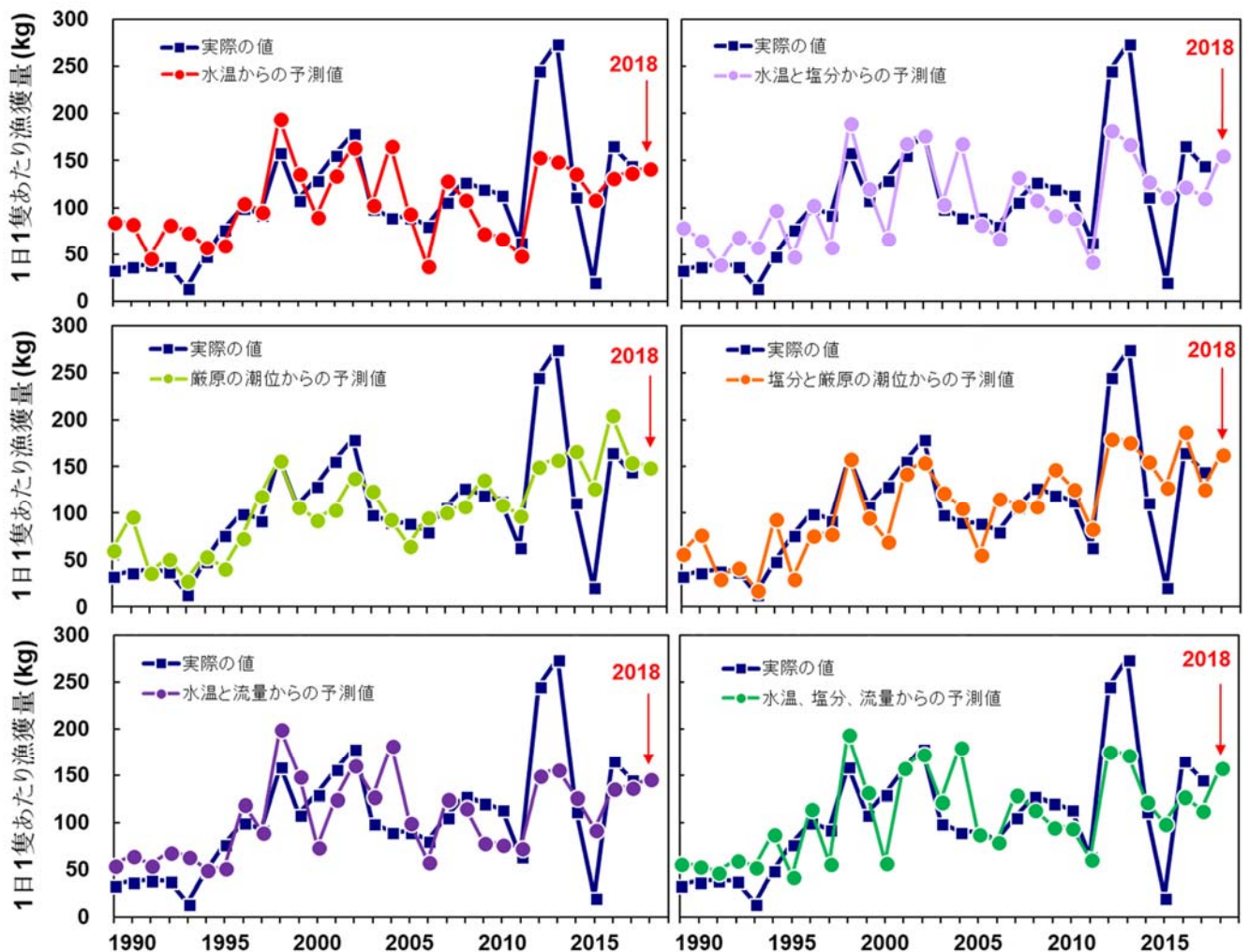


図2：対馬海峡部の6月の環境条件から予測した9～11月の来遊資源水準

各予測モデルから推定された来遊資源水準は「1日1隻あたり143～164kg」となりましたが、予測モデルの中でも精度の良い複数のモデルがより高い水準を示したことなどを考慮して、来遊資源水準は「1日1隻あたり150～160kg」としました。これは過去5年平均（2013～2017年;144kg）と比べると「平年並み～やや高め」、過去10年平均（2008～2017年;139kg）と比べると「平年並み～やや高め」の水準です。

4. その他

例年、6～7月頃より但馬地域の定置網などで小型のソデイカの混獲が始まり、この時期に混獲が多い年はその年のソデイカ漁が好漁となる傾向が見られます。これらの情報は、今後、定量化を通じて予測精度の向上に役立つ可能性があります。関連する情報がありましたら、但馬水産技術センターまでお知らせください。

また、漁期開始後の漁場形成は、漁場周辺の水温や冷水域の動向などにも大きく影響を受けることが明らかになっています。当センターでは、ホームページに「海の天気図」として翌週の但馬沖海域の海況予測図を掲載していますので、併せてご参照ください。

(<http://www.hyogo-suigi.jp/tajima/tenkizu/menu.htm>)

次回は、漁期中の10月中旬頃に「中短期漁況予報」を発表する予定です。